

清輔本

古今和歌集上

日本古典文学会編

清輔本  
古今和歌集  
上

〈検印省略〉

昭和四十八年十二月一日印刷  
昭和四十九年一月十日発行  
定価（上下揃） 二、五〇〇円

編 集 日本古典文学会

東京都千代田区六番町四山菱ビル  
代表者 山岸徳平

刊 行 日本古典文学刊行会

東京都千代田区六番町四山菱ビル  
代表者 山岸徳平

製 作 東京連合印刷株式会社

東京都新宿区新宿二―十九―十三  
サカゼンビル

印 刷 株式会社精興社

東京都青梅市根ヶ布一―三八五

落丁本・乱丁本はお取替いたします

清輔本

古今和歌集上

日本古典文学会編



## 凡 例

一、宮本長則氏藏清輔本古今和歌集（写本二帖）を、可能な限り原本に忠実に翻刻したものである。

一、翻刻に際し、仮名づかい・見せけち・補入・傍書・頭書・裾書・改行・改面など、すべて原本のままとし、原本の一面を一頁に収めた。

一、但し、技術的な問題から、また読みやすさを考慮して、次のような方針に従った。

1 漢字は原則として正体に統一し、変体平仮名は通行字体に統一した。但し、たとえば次のような漢字は、原本のまま略体・異体をも用いた。

云 哥 調 轉 号 条 早 甫 弁 万 余

2 朱書は、（朱）（以下三行朱）のように、また朱合点は（朱点）、朱線は（朱線）と注記した。

3 声点・ヲコト点の類はすべて省略した。

4 歌頭にアラビア数字で『国歌大観』番号を付した。

5 柱に原本の丁数・表裏を、（1ウ）（2オ）などの形式で示した。

一、巻末に解題を加え、作者索引・初句索引を添えた。

二、本書は、本文については池田利夫（鶴見大学教授）、大曾根章介（中央大学教授）、久保田淳（東京大学助教授）、竹鼻績（山梨女子短期大学助教授）の四名が分担し、解題は竹鼻、索引は池田が担当した。

「古今和謠集」上

(表紙)

春 夏 秋 冬

賀 離別 羈旅 物名

以貫之自筆本書寫古今也

件本於皇太后宮燒畢云々

和哥等不似餘本其說頗違矣

通宗



やまとうたは人のこゝろをたねと  
してよろつのことはとそなれり  
ける世中にある人ことわさしけき  
ものなれはこゝろにおもふことを見る  
ものきく物につけていひいたせるな  
りはなになくうくひす水にすむ  
かはつのこゑをきけはいきとしい  
けるものいつれか哥をよまさりける

ちからをもいれすしてあめつちを  
うこかしめにみえぬをに神をも  
あはれとおもはせおとこをんなの  
中をもやはらけたけきものゝふの  
こゝろをもなくさむるはうたなり  
このうたあめつちのひらけはし  
まりけるときよりいてきにけりし  
かれともよにつたはれることはひさか

（朱点）  
したてるひ  
めはあめわ  
かみこのめ

なりせうとのかみのかたとりをかたに、うつりてかゝやくをよめるえのすかたなるへしこれらはもしのかすもさたまらすうたのやうにもあらぬことゝもなり

たのあめにしてはしたてるひめに

はしまりあらかねのつちにしては

すさのをのみことよりそおりにける

ちはやふる神世には調はもしもさ

たまらすすなほにてことのこゝろ

わきかたかりけらし人のよとなり

てすさのをのみことよりそみそ

もしあまりひともしはよみけるかく

あめのうきはしのできたにてもかみをかみとなり給へることをいへるうた也

すさのをの  
みことはあ  
まてのおほん  
かみのこの  
かみ也をん  
なとすみた  
まはんとて  
いつものく  
にゝみやつ  
くりし給  
ときにその  
所にやいろ  
くものたつ  
をみてよみ  
給へる也  
やくもたつ  
いつもやへ  
かきつまこ  
めにやへか  
きつくるそ

てそ花をめてとりをうらやみかす

みをあはれひ露をかなしふ心こと

はおほくさま／＼になりにけるとをき

所もいてたつあしもとよりはしま

りてとし月をわたりたかき山も

ふもとのちりひちよりなりてあま

雲たなひくまておひのほれることく

にこのうたもかくのことくなるへし

のやへかき  
を

／＼(墨点・朱点)

オホサキノ

ミカトノナニハ

ツニテミコト

キコエケルトキ

東宮ヲタカヒ

ニユツリテクラ

キニツキ給ハテ

ミトセニナリニ

ケレハワウニ

トイフ人ノ

イフカリ思テ

ヨミテタテマ

ツリケルウタ

ナリコノハナハ

ムメノハナライフ

ナルヘシ

風  
考別紙

假名序 (4オ)

なにはつのうたはみかとおほむはし

め也(朱)あさかやまのことはうねへの

たはふれよりよみてこのふたうたは

調(朱)のちうはのやうにてそてならふ

人のはしめにもしける抑うたのさ

まむつなりからうたもかくそあるへ

きそのむくさのひとつにはそへうた

おほさゝきのみかとをそへたてまつ

／＼(キ或)

カツラノヲホ

キミヲミチノ

クニヘツカハシ

タリケルニクニ

ノツカサコト

ヲロカナリトシ

マウケナトシ

タリケレト

スサマシケレハ

ウネメナリ

ケルヲウナノ

カハラケトリ

テヨメルナリ

コレニソヲホ

キミノコハロ

トケニケル

此葛城大

君左大臣

橘卿也後

給橘姓見

万葉

一一

れるうた

なにはつにさくやこのはな冬こもり

いまはゝるへとさくやこのはな

といへるなるへし

ふたつにはかそへうた

ス（朱）

さくはなにおもひつくみのあちきなさ

身にいたつきのいるもしらすて

といへるなるへし

これはたゞことにいひて物に  
たとへなともせぬ事也このうた

賦  
難義也  
考別紙

有拾遺集  
ツクミヲカクス  
志賀黒主云

比

いかにいへるにかあらんこの心えかた  
しいつゝにたゞ事うたといへる  
なんこれにはかなふへき

みつにはなそらへうた

君にけさあしたのしものおきていなは

こひしきことにきえやわたらん

といへるなるへし

これはものにもなすらへてそれかや  
うになんあるとやうにいふ也この哥  
よくかなへりともみえす  
たらちねのをやのかうこのまゆこ  
もりいふせくもあるかいもにあは  
すて かやうなるやこれにかなふへからん

興

よつにはたとへうた

わかこひはよむともつきしありそうみの

はまのまさこはよみつくすとも

といへるなるへし

これはよろつの草木とりけた物につけて心をみするなりこの哥は

かくれたる所なんなきされとはしめ

のそへうたとをなしやうなれはすこし

さまをかへたるなるへし

すまのあまのしほやくけふり風を

いたみおもはぬかたにたなひきにけり

このうたなとやかなふへからん



雅

いつゝにはたゝことうた

此哥在戀  
物四

いつはりのなきよなりせはいかはかり

人のことの葉うれしからまし

といへるなるへし

これはことのとゝのほりたゝしきを  
いふなりこの哥の心さらになはす

とめうたとやいふへからん

やまさくらあくまでいろをみつるかな  
はなちるへくもかせふかぬよに

頌

むつにはいはひうた

在催馬樂  
此殿  
可考別紙

このとのはむへもとひけりさきくさの